

生徒の活動報告

杉本 雅子・尾方 英美・亀井 千恵子
三小田 博昭・松本 拓也

1 公的機関、教育機関が主催する生徒イベント参加報告 SGH高校生フォーラム

主催 文部科学省、国立大学法人筑波大学

会場 東京国際フォーラム

参加生徒 高校2年生 3名

高校1年生（留学生） 1名

引率 原順子、杉本雅子

日程 12月15日（土）

9:00 受付

10:00 開会式

10:40 ポスターセッション（英語による発表4分、
質疑応答4分）

本校テーマ：「持続可能な地球環境を目指して～モンゴルFWを通して～」

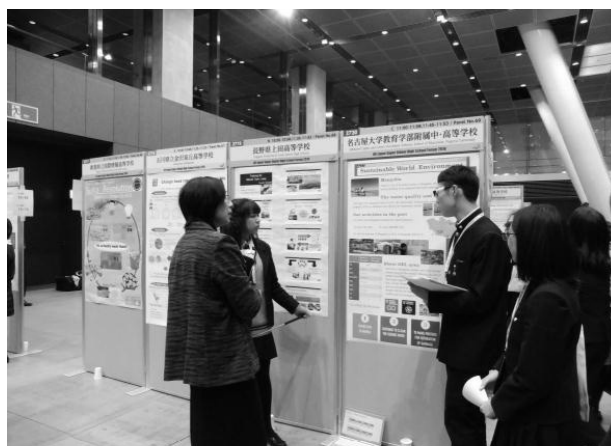
13:15 生徒交流会【テーマ別分科会】

（本校は、「3：水・環境・エネルギー・気候変動」のグループ）

15:00 生徒交流会【全大会】

16:00 ポスターセッション優秀校4校による発表

16:35～17:00 表彰式・閉会式



本校のプレゼンテーション



午後はワールドカフェ方式のディスカッション



ポスターセッション会場



表彰式

全国のSGH校から参加した生徒と留学生が一堂に会し、一日、英語を使って交流した。生徒たちは英語を使ったコミュニケーションに苦労したものの、各地の高校生と世界的な問題について話し合うことで、自分たちの生活を俯瞰して見る視点を得たようだ。参加した生徒が自分の生活を見直すとともに、他の生徒に刺激を与えてくれることを期待したい。

今回の引率で感じた課題を三つ挙げる。一つは「ポスターの作成方法」である。ほとんどの学校がパソコンで作っていた。二つ目は「英語のコミュニケーション」である。スピーチはフリーハンドで行いたい。三つ目は「研究テーマ」である。生徒はモンゴル研修に意義を感じているが、モンゴルをフィールドとした、環境問題に関するテーマに生徒は受け身的であった。過去の研究結果を整理し、研究の意義をモンゴル研修参加者に伝えていくことが大切だと改めて感じた。

(文責 杉本雅子)

2 国内外の大学や企業・国際機関等との連絡

(1) アジアユースリーダーズ2017 (in 東京)

1) 目的

開催国の環境・経済・社会等の問題についてディスカッション・発表(英語)を行い、多国間交流を通じて価値観の多様性を学ぶとともに同世代の友人ネットワーク構築の機会を提供する。また、現実的な社会・環境問題についての学習、視察、チームディスカッションを通じ、解決に向けたロジックを磨き、次代を担う若者の社会・環境問題に対する意識の向上、並びに、グローバルリーダーを育成する。

2) 内容

公益財団法人イオンワンパーセントクラブ主催の高校生多国間交流プロジェクトである。

アジア6カ国(インドネシア・ベトナム・マレーシア・タイ・中国・日本)から高校生が一堂に会し、開催地域の社会問題をテーマにしたディスカッションを通じて、価値観の多様性を学ぶと共に、テーマに関する改善・解決策を政府に提案する。今回のテーマは「食育」。

3) 本校参加生徒

高校1年生2名、高校2年生4名(男子1/女子4)

4) 行程

8月21日 オリエンテーション(参加者は8・9人ごとのチームに分けられる。)

基調講義I「今起きていること、そして持続的な将来をどう我々が創るのか」
ウェルカムパーティー

8月22日 食育レクチャー・食育体験学習、食育スーパーマーケットツアー(カスミつくばセンター)、イオン牛久農場視察

8月23日 基調講義II

「日本および諸外国における栄養・食生活の変遷と慢性疾患との関連」

ケーススタディーとグループワーク

「タイの子供の栄養状態と食物摂取と食環境」「インドネシアにおける若い女性の栄養課題」

特別講義

「SDGsの中で食と栄養を考える：ベトナムにおける試みを中心にして」

ディナーセミナー

「ユネスコ無形文化遺産 和食」

8月24日 体験(おにぎり、味噌汁、卵焼き調理実習体験)

ヒアリング活動(イオンスタイル碑文谷にて、消費者にインタビュー)

8月25日 ホテル内にて、終日グループディスカッション

8月26日 成果発表会(プレゼンテーション)、審査結果発表、提言引き継ぎ式

フェアウェルパーティー

5) 事前学習

本校において「食育」に関する基礎知識の確認と日本と世界の食に関する問題について学習した。生徒たちは学校教育で培った知識を活用し、さらに疑問に思ったこと、日本ではなく他国における食に関する問題はどこに焦点があり、どのような対策がとられているのか、などについて調べ、それについての自分の考えを英語で述べ、ディスカッションをする練習を行った。

6) 事前学習会

7月30日(日)に、お茶の水女子大学附属高等学校で日本チーム全体の打ち合わせおよび事前学習会が行われた。高齢化社会の先進国である日本では食育への取り組みが高まっており、生徒たちは自らの食育の実体験や日本で問題となっている食の問題など事前にリサーチした事についてディスカッションをし、情報の共有をした。

7) 生徒参加者

国	男	女	合計	チームリーダー
インドネシア	3	4	7	0
ベトナム	3	4	7	2
マレーシア	3	4	7	1
タイ	2	5	7	0
中国	3	5	8	1
日本	4	13	17	2
合計	18	35	53	

8) 現地での活動

初日の15時よりオリエンテーションを行い、グループごとに他国の生徒たちと顔合わせ。その後、基調講義を

受け、英語による質疑応答も行った。

研修2日目から4日目までは、フィールド・ワークを行う日とホテルで一日レクチャーや基調講義を受ける日と交互に設定されていた。英語で行われるレクチャーや基調講義は、話されている内容の難易度が高かったものの、講義の後は積極的に質問したり、グループ内で議論を交わしたり、お互いの考えを共有していった。その中で、グループごとに現代の「食育」に関する問題・課題を発見し、また、解決策を模索していった。

4日目の夕食後の時間と5日目を終日利用して、グループごとにプレゼンテーションの準備を行った。インタビュー結果やこれまでの基調講義で得た知識、事前に調べてきた情報を活用しながらグループ内で意見を出し合い、考えをまとめていく。生活してきた国が違う生徒たちは異なる文化背景を持っているため、意見が対立したり、停滞したりすることもあった。議論を重ねて、相互に納得しあえる結論を見つけ出すことは容易ではありませんが、粘り強く話し合いを続け、お互いに歩み寄ることができていた。

6日目に、審査員の前でプレゼンテーションを行い、評価を受けた。

9) 参加した生徒たちへの影響

それぞれが目標をもって参加した今回のプロジェクトにおいて、初日に出了た生徒たちの感想の中で多かったのが「日本の子の英語は聞き取れるが、違う国の子の英語が聞き取りにくい」というものだった。単純に英語スキルの差の違いもあるが、話し方の癖が国ごとに違い戸惑っていたのが印象的であった。日本で、普段日本に関わりのある人たちと英語を話すのとは訳が違うのだということに気がつき、衝撃を受けていた。しかし、プロジェクトに対して積極的な姿勢を常に持ち続けることで、より多くのコミュニケーションをとることができ、徐々に耳も慣れ、自分が成長していくのが実感できたようであった。

このプロジェクトを通して生徒たちはかけがえのない友人ができたと言っていた。同じグループで1週間生活を送り、深く議論しあい、発表に向けて協力しあった絆は、1週間とは思えないほど深く強いものとなり、そこでできた友人とは今も連絡を取り合っているようである。この点において、「多国間交流を通じて価値観の多様性を学ぶとともに同世代の友人ネットワーク構築の機会を提供する」という目的は達成されたと考えられる。

(文責 尾方英美)

(2) 模擬国連

1) 目的

193の国から大使が派遣され、人権、核開発や軍縮、環境、紛争等、多岐にわたる国際問題について議論する実際の国際連合を模す。参加者一人一人が一国の大使となり、議題に挙げられた国際問題について国益を背負った各国大使の立場で議論する事によって、国際問題の多角的視点からの理解や、その複雑さを理解するとともに、交渉力や論理的思考力、英語力の向上をねらう。

2) 内容

大会開催日11月17・18日に先立ち、まず、会議に臨む前に事前準備を1カ月かけて行った。2人1組のチームを作り、指定された国の国連大使として、与えられた会議の議題について、自分の国の立場に立った決議案を英語で作成する。指定された「自国」の状況をリサーチし、議題に関してどのような立場や政策をとっているのかを知り、会議での交渉の準備をしておく。東京の国連大学本部では、参加者に1時間の講義が行われ、議題についての解説が行われる。とはいっても、各国においてその実情は異なるものであるため、着目すべき点、そして実際の国際連合の動きや実践が紹介される。その後、事前に分けられたグループ別に、二つの会場で会議が行われる。会議は二日間に渡って行われ、主張が近い国と交渉して共同で修正決議案を作り、より多くの賛同者を集めていく。最終的に絞り込まれた修正案は投票にかけられ、過半数の賛成で可決される。会議の進行は以下の通りである。

1. スピーチ (公式発言)

各国の議題に関する状況や主張を発言する。言語は英語とする。このスピーチをもとに、各国が自国の主張に近い国と交渉を行う。このスピーチは非公式討議をはさみながら二日間に渡って行われる。会議が進んでいくと、どの国の間でどのような交渉を行っているか、など議論の進捗を全体で共有する時間が設けられる。

2. 非公式討議 (informal debate)

スピーチの間に行われる。非公式討議には全体で議論を共有しながら会議を進める着席討議 (moderated caucus) と自由に席を立てて交渉できる非着席討議 (unmoderated caucus) がある。「議論」や「交渉」はこの時間に行われる。参加者はどのようにこの二つを使い分けるかなども意識して会議戦略を立てる。非着席討議においては日本語を使用することも可能である。この場ではリーダーシップと協調性、また他国からの賛同を得るための話術と交渉術が要求される。またチーム内での役割分担と連携もカギとなる。限られた時間内で、いかに自国を印象付け、また自国の主張の理解と賛同を得るか、念入りな作戦と行動力が必要である。

3. 決議案・修正案の作成と提出

後の投票に向け、非公式討議での交渉を重ねながら、自国と同じ立場だけでなく、できるだけ多くの国の指示を取り込んだ決議案を英語で作成する。

4. 投票と決議採択

5. 成果文書の作成

担当国の国益を追求しつつ、国際社会にとっても有益かつ実効的な解決策・政策を盛り込むことを、最終的な目標とし、各国が作成する。文書は実際の国連で用いられる用語などに準拠しながら、英語で作成される。事前の学習と、場数を踏んだ経験が生かされる場でもある。



・非着席討議 (unmoderated caucus)

・開会式後の集合撮影



・公式発言



・大会二日目

(別グループと会場を交換して行われる)



3) 検証・評価

今回の議題は「武器移送」であった。また、本校生徒はメキシコの大使として会議に参加することになった。本部から膨大な量の要綱と課題が送付され、初参加である生徒たちは戸惑っていたが、この大会の性質と内容の深さを鑑みれば必要最低限のものであったかもしれない。幸か不幸か、地方大会を飛ばし、いきなりの全国大会への参加であったため、模擬国連の意義や難しさに生徒たちは大会直前まで気づくことができず、準備が遅れてしまった。しかしながら、会議の流れの理解もままならない状態で参加したにもかかわらず、生徒たちは二日間最後まで投げだすことなく、パートナーと協力し合いながら、自分にできることを考え、行動した。準備不足

について大変後悔していたようであったが、これまでの大会参加の経験と、準備と練習を積み重ねて参加した全国の生徒たちとの活動は、大いに刺激になったといえる。
(文責 亀井千恵子)

3 普及に関する取組み

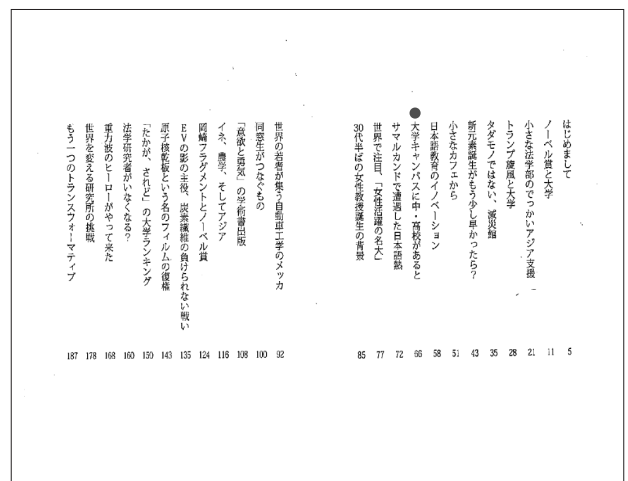
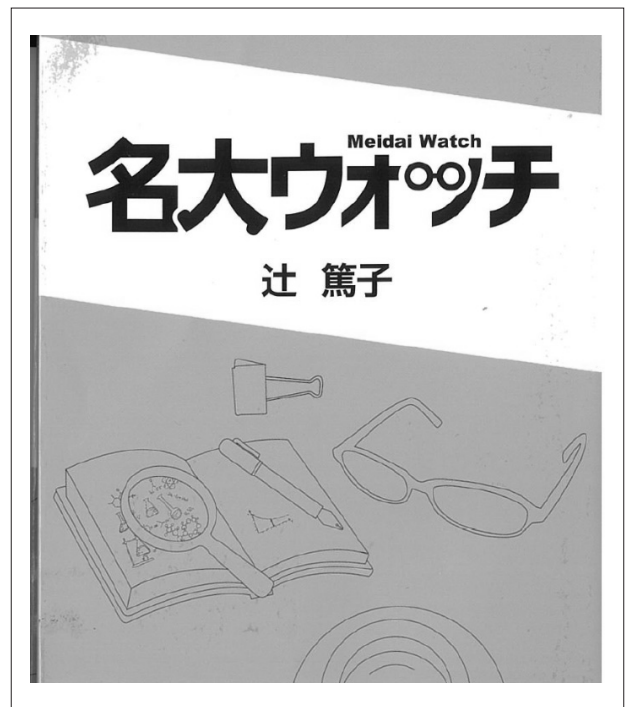
(1) 報道機関の活用

1) 名大トピックスの活用

名大トピックスは、名古屋大学の広報室が作成している広報誌である。紙媒体のものと、電子版と両方ある。附属学校のSGHに関する取組みも、「名大トピックス」に多く掲載し、活動内容を広く学内外に伝えている。No.306では、「学生の元気 教育学部附属中・高等学校の取り組み」として大きく誌面を割いていただくことができた。



で、辻篤子さんが附属学校の活動を掲載している。定価556円+税で販売している。



2) 出版物の活用

「名大ウォッチ」は、文庫本として名古屋大学内のBooksフロンテ、北部購買(北部厚生会館1階)、南部生協プラザ(南部厚生会館2階)でも販売している。この中に「大学キャンパス内に中・高があると」という章

3) 新聞の活用

今年度のSGH成果発表会(H31年2月8日)が「日本教育新聞社」の取材を受け新聞紙面に掲載された。写真と一緒に本校で行っているSGHの紹介も記載された。





(文責 三小田博昭)

(2) HPの活用

1) 高校1年生SGHグローバルキャリアモデルシンポジウム

総合人間科の一環として、本校卒業生で、現在ジャズ歌手として活躍されている大野えりさんを講師にお招きし講演会を行った。自分の目標を見失わないこと、自分自身を信じてあげることなど、ご自身の経験を交えながら様々な話を聞かせていただいた。本物のジャズ歌手の歌声も聞かせてくださり、高校1年生にとって素晴らしい時間となった。



2) SGH課題研究 in Kyoto with American students

アメリカノースカロライナ州からの留学生が本校のホストファミリーとともに京都へ行った。金閣寺、清水寺、伏見稲荷大社などを周り、日本の歴史に触れた。



3) さくらサイエンス交流

「日本・アジア青少年サイエンス交流事業」(通称「さくらサイエンスプラン」)が行われ、本校の高校1年生120名と海外の生徒85名が交流を行った。午前中は豊田講堂にて、ノーベル物理学賞を受賞された名古屋大学の天野浩教授の講演を拝聴した。その後グループに分かれて昼食、交流会を行った。本校生徒は折り紙やけん玉、かるたなどを用意し、海外の生徒たちも、母国のお菓子やお土産のマグネットなどを持参するなどして、とても有意義な交流会が行われた。本校生徒にとっても、改めて日本の文化を見直したり、海外の文化に触れたりする、とても良い機会となった。





4) モンゴル研修

日本大使館とJICAモンゴル事務所を訪問した。現在のモンゴルが抱える問題や、日本の外交についてお話を聞いた。最前線で仕事をされている担当の方々のお話はとても臨場感があった。その他にも、サンサル村では同世代の高校生と交流し、アルタンボラクでは遊牧民の生活を体験した。淡水資源保護センターにも訪問し、モンゴルの淡水流域に生息する魚の種類や鳥の種類について調査、その後、ウランバートルのツール川で、水質・大気調査を行った。



外にも京都の高校が参加した。また英国では、現地の高校生も多数参加しケンブリッジ大学教員の指導のもとで日英共同のワークショップを行った。



(文責 松本拓也)



5) UK-JAPAN 2018

2016年度に、名古屋大学を拠点に実施した「2016 UK-JAPANサイエンスワークショップin名古屋」が今年度は英国のケンブリッジを舞台に開催された。本校以